

渡辺めぐみ著

『農業労働とジェンダー』

——生きがいの戦略』

評者：倉敷 伸子

本書は、家族農業経営における女性労働の諸問題を、ジェンダーに関する「ひと連なりの問題群」として、体系的に示すことを目的として綴られた論文集成である。しかし、単に、農業労働を「素材」として書かれた、社会学的知見の発展に貢献するための研究書ではない。本書の底には、農家に向けられた部外者の手前勝手な不当な決めつけへの怒りと、当事者性を起点として農業をめぐる困難を理解したいという志があり、それが、時として、研究書としての統制をくぐり抜けた著者の生の言葉として噴出する。『「ニート」の若者に農業をさせればよい』という政治家、「青年のいない青年団」を笑いの題材とするテレビ番組、近代家族規範を基準に農家批判をする学者、「女の子は大キライ」と漏らした結婚相談員、「科学的とは言えない」根拠で農家の「嫁不足」を論じる人々、農家女性の人間関係について容喙する知識人言説が、次々に批判の俎上にのせられる。一方で、本書の実証性の担保となるインタビュー調査の考察は、丁寧かつ冷静である。労働する者自身の評価を基準とした分析を試みる著者の視点は揺るぎなく、読者は、著者の分析を通して、語り手一人ひとりの労働への思いを知ることが可能となる。巻末に章を分けて設けられた「付記」で、

「最後にお断りしなければならないこと」として、著者が農家に育ったなかでの経験、特に祖母、母、自分の関係が語られる。本書は、研究書であると同時に、自身の存在の背後に連なる人々の代弁者でありたいと言う願いと、自分に代弁者となる資格があるのかという自省によって生み出された作品だといえる。

さて、本書の構成は以下の通りである。

序章／第1章「農村女性」に関する研究の動向／第2章「配偶者問題」にみる農村へのマイナス・イメージ／第3章ジェンダー視点からの分析枠組み／第4章性別役割分業の生成パターン—いちご栽培における性別役割の逆転／第5章家族農業経営における女性労働の問題構造—ジェンダー戦略化された「やりがい」の発見／第6章酪農の近代化と女性労働—子牛の世話は「女性向き」か／第7章販売労働とジェンダー—女性達のさまざまな思い／終章

まず、簡単に内容を紹介したい。第1章では、「家」中心の農村社会学がジェンダーの視点を欠落させてきたこと、一方、農村女性を対象とした研究では、丸岡秀子を含めて、問題を農村の封建的な生産関係以外に見出してこなかったこと、また、高度経済成長下の議論は、近代家族の主婦役割を基準とする傾向が強くみられることを指摘する。第2章では、農村のマイナス・イメージの実例として「配偶者問題」言説をとりあげて、何が問題とされ、誰が問題の原因と名指されたのを追ひ、語り手たちの立場を「コロニアリズム的」と断じる。第3章以下は、1999年、2002年に関東地方平地農村地域専業農家で、また2004年に関東地方酪農地帯の開拓村で、それぞれ行われた当事者へのインタビュー調査による、性別役割分業についての分析である。第3章では、調査の概要と、「当事者の農作業への意味づけ」を軸とした分析の必要性が語られる。第4章は、「夫も妻も一緒の仕事を

している」とされるイチゴ栽培農家の調査を通して、家族農業経営の労働分配は何を基準としているのかが明らかにされる。第5章では、労働当事者の語りのなかで頻出する「細かい」労働という表現に着目し、労働のジェンダー化と経営の関連を考察する。第6章は、「酪農は女性らしさを活かす」とする言説への批判的検証として、酪農における女性労働の位置づけを検討する。第7章は、「女性の感性」を活かすとして称揚される農産物販売に焦点をあて、家族農業経営のなかでの女性労働の評価を、女性の「やりがい」志向とからめて分析する。そして終章では、全体のまとめと、そこから導き出される現状への提言が語られる。

以上から理解されるように、本書は、労働過程に内在するジェンダーに注目することで、農業労働における女性の地位を、ジェンダーの近代的編成の一環に位置づけることを目指している。そのなかで特筆されるべきは、作業を行う当事者による労働評価を基軸にすえた分析により、客観的装いをもつ（つまり農業経営において支配的な）言説に隠されているジェンダー・バイアスが掘り起こされ、家族農業経営におけるジェンダー間分業を支える規範と労働実態の乖離、それゆえに労働実績が労働評価につながらない女性労働の隘路が明らかにされたことにある。具体的にみていこう。

まず、農家の労働分配は何に依拠しているのか。一般に、重労働は男性、軽労働は女性という振り分けが想起されるが、著者は、同じイチゴ栽培農家でも、性別分業の振り分けが農家によって異なることを見いだす。それは、各農家の経営主男性が、農業経営に重要と思うものをまず自分に配分していることによる。それ以外の仕事が女性に振られるが、配分の正当化として「女性向き」という表現が使われるにすぎない。例えば、下葉搔きは重労働であるが、これ

を経営上重要と捉えていない農家では、根気が要る仕事であることを理由に、「細かい地道な作業は女性に向いている」と女性に配分される。また、男性向きとされ、実際に男性が担っている機械作業の分配について、当事者女性は、技術力や体力による分業とは受け止めていない。むしろ機械作業を覚えることによる負担の増加への懸念、そのほうが普通だという認識などが、役割配分の根拠として考えられていた。

さて、このような労働配分の構図に、女性労働者はどう対応しているのか。著者は、彼女たちによる「ジェンダー化戦略」を、その語りから読み取る。これは、結婚前の経験など個人的キャリアよりも、各戸経営主による配分で担当領域が決められてしまう立場の者が、自身の裁量権を獲得するために、自ら「女性向きの仕事」という枠を固めて囲い込みを計るというものである。その背景には「やり甲斐」についてのジェンダー格差があることを、著者は指摘する。女性が自分の労働にも「やり甲斐」を求めるならば、男性と競合しない分野（つまり、男性にとって位置づけが低い領域）を開拓することが必要となる。「女性向きの仕事」としてその領域を囲い込むことは、環境を変えずに利益（裁量権に裏付けられたやり甲斐）を獲得するための戦略であると、著者はみる。

では、このような「女性向き」の仕事という分別は、女性の労働実績の承認につながるのだろうか。著者は、近年「女性向き」と位置づけられている、農作物直販と畜産業の当事者インタビューから、その陥穽を指摘する。直販は、もともと家族経営の中で重視されず、だからこそ女性が参入できた隙間的領域だった。女性はそこでの「手間」を惜しまないが、家族経営では依然評価されず、労働への金銭的還元に作用しない。結局、女性は手間の代償を、「やり甲斐」（客に喜んでもらえる、うちの野菜を評価

してくれるなど) という精神性の次元に求めているのが現状である。一方、畜産業の哺育育成牛管理も、重要度の高い作業領域と考えられていなかったため、女性が担当した分野だった。その後、急速な酪農近代化と規模拡大によって重要性が高まり、ここに「酪農業は母性を持つ女性に向いている」という言説が加わった。しかし、近代化と規模拡大を支えたのは、「母性」ではなく女性の過重労働と仕事への責任感だったことは、当事者が度々使う「牛を殺してしまった」という言葉が示している。このように「女性向き」という「イメージ」は、労働負担の実際を隠蔽し、労働のジェンダー化のみを進行させる結果をもたらす。さらにその先には、女性の仕事だから軽労働という位置づけがなされる可能性もあることが示唆される。

終章で、男性が自らに分配し囲い込んできた農作業とそれ以外の作業の再分配のために、女性が技術研修で作業スキルを獲得するための環境整備が提言されるが、このような提言が、当事者の語りを通じた分析によってなされていることも、本書の重要な意義である。

さて、このように、実証性とそれをジェンダー分析に高める方法論を兼ね備えた本書であるが、著者の議論がいまひとつ理解しきれない箇所もあった。最後に、その点について少し述べたい。

[分析対象の位置] 本書は、1999年から2004年にかけて行った専業農家の調査の結果をもとに、農業労働のジェンダーを語る。一方、対象とした専業農家が農業全体のなかで、または本書の調査時期が「家制度」崩壊後の農家経営のなかで、どのようなポジションにあるのかについて、本書の関心は薄いように見受けられる。だが、ジェンダーは時代の構築物である。著者も触れているが、戦後の農業は、小規模自作専業農家中心から、経営主以外の農業外就労へ、

さらに経営主の雇用者化へとすすみ、多くの農家が「土地持ち労働者」世帯となる時代に変転した。その中で、農業のみ就労者は女性が男性を上回るようになり、女性労働が主力化する一方、女性は農業を含む多就業によって自家の現金収入と農村工業の低賃金構造を支えてきた。そして、今や「残存労働力」とされた中高年女性も農業自体から撤退しつつある。熊谷苑子、永野由紀子らの詳細な調査が示すとおり、この間、農家内ではたびたび労働力の再分配が図られてきた。この変化に対応して、農業労働や農家経営におけるジェンダー言説は、調整と書き換えを繰り返してきたと思われる。本書が抽出した労働のジェンダー化は、この状況の何に規定されるものなのか。本書が対象とする専業農家は、全体の農業状況のなかで労働のジェンダー化に関してどのような立場性をもつと考えるのか。本書の分析の意味をより明確にするには、その見取り図を読者と共有することが必要と思われる。

[イメージという切り口の有効性] 著者は「本書の大目的」として、農業・農村の「ステレオタイプ化されたプラス／マイナス・イメージに対する検証」を掲げる。では、「イメージ」とは何なのか。本書では、その定義はなされていない。本書が、実証研究として、労働配分とジェンダーについて多くの示唆を読者に与えるものだけに、そこで抽出されたジェンダーに関する言説を、全て無条件に「イメージ」に収斂していいのか疑問が残る。

特に第3章以降について、著者は、「すべて、[農業・農村]のステレオタイプなプラス・イメージ戦略がもたらす問題について、慎重に検証するための実証的研究」と位置づけ、「イメージ」検証としての意義を強調している。しかし、「ステレオタイプなプラス・イメージ」、すなわち「いきいきと働く農村女性」像の流布

は、著者が言うように、行政が「マイナス・イメージを払拭しようと、積極的イメージを広めようとした」産物なのだろうか。私の理解するところ、「いきいきと働く農村女性」像は、農政方針の転換の中で、明確な意図のもとに流布された政治性の高い言説である。高橋由紀の指摘によれば、それまで女性労働を「活力ある農村社会を形成していくうえで大きな阻害要因」とまで述べていた『農業白書』が、「婦人の果たすべき役割は大きい」との表現に一転するのが1986年だった。その後、政府は1992年に「新しい食料・農業・農村政策の方向」とそれに伴う「農山漁村の女性に関する中長期ビジョン」を公表し、これに呼応するように、農政と深い関係にある農業構造改善協会や中央畜産会、また全国農業協同組合発行の雑誌が、婦人または女性を題に掲げた記事を掲載し始める。この一連の動きの根底にあるのは、もはや女性労働を「隠された」存在にとどめおけなくなった農業構造の現状にある。だとするならば、「いきいきと働く農村女性」喧伝への批判を有効とするには、ジェンダー的観点を持ち出すことで現状を乗り切ろうとする農政の農業観そのものへの検討が必要となる。労働のジェンダー化言説の指摘は、大変に重要である。しかし、結婚相談員の発言も農政の指針も、出自や受容範囲などのレベルを問わずに「イメージ」の一語に還元することは、かえって問題の矮小化につながるのではないか。

[ジェンダー的労働編成論と家族農業経営の位相] 本書の課題設定の出発点には、農村女性の問題を、封建的残滓と捉えるような近代化論や、ジェンダーへの視点を欠いてきた農村社会学的アプローチなど、農村の女性問題を非一般化する認識への疑義がある。これは、千葉悦子、古久保さくらの議論を受け継ぐものであ

るが、それらが、農村労働のジェンダーを労働一般のジェンダー再編の文脈に位置づけることに力点を置くのに対し、本書は、「家産」の問題にも踏み込んでいる。特に「家産」意識により男性の土地相続が正当化され、女性は「見返りのない貢献」を自らに納得させる論理を得るという、意識のダブル・スタンダードの指摘は卓見である。では、この「家産」意識は、ジェンダー編成の問題で解けるのか、それとも、やはり都市労働とは異質の労働原理をもつ農業独自の問題として考えるべきなのか。「家産」意識と労働の正当な評価が矛盾するのは、相続は男子という慣習と、小規模経営は家族労働によって維持されるという2つの要因がある。後者はジェンダー編成を変えても解消されまい。家族関係を土台に成立する労働原理がある以上、婚姻によって新規参入した側の性が不利益を蒙る構図は続き、また、婚家で蓄積した職業スキルは離婚で無に帰す。推奨されている「嫁」の養子縁組も、経営を家族関係でつなぐ点でこの原理を踏襲している。この矛盾の解消を第一義とするのならば、現状での選択肢は、農業の企業化に行き着いてしまうと思われるのだが、著者はどのように考えるのだろうか。本書が応えるべき議論ではないが、ジェンダーから「家産」意識に切り込んだ著者だからこそその展望を、是非知りたいと思った。

本書が、男女の別、または研究者か否かを越えて、農業労働に関心をもつ多くの人々に読まれ、労働のジェンダー化が隠蔽する問題についての議論が共有されることを期待する。

(渡辺めぐみ著『農業労働とジェンダー—生きがいの戦略』有信堂高文社、2009年12月刊、viii+212+v頁、定価4000円+税)

(くらしき・のぶこ 四国学院大学文学部教授)